

カサガイ

Cellana mazatlanica

オキナエビス目
ヨメガカサ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

殻は、大成すると殻長 8cm を超える傘型で、殻高は高い。厚質。殻表には、不規則な顆粒を持つ放射肋が密に存在する。幼貝は、主に灰褐色で放射肋は目立たないが、大形個体では濁褐色となり、肋が顕著になる。やや波当たりの強い潮間帯中部の岩礁に生息し、表面の藻類を摂食する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

比較的波当たりの強い岩礁や護岸の潮間帯中部に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

人間による採集と岩礁海岸の改変が生存を脅かす要因と考えられる。海産生物では数少ない天然記念物でもあり、啓発を行うことが望ましい。

【関連文献】

堀越和夫ら, 1997; 奥谷喬司, 2000.



(執筆: 黒住耐二)

オガサワラスガイ

Lunella ogasawarana

オキナエビス目
リュウテン科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高・殻径 3cm 程度の亜菱形、厚質堅固。臍孔は明瞭に開き、周辺はオレンジ色。殻表には弱い螺肋を比較的密に有し、螺肋上には弱い顆粒が並ぶ。フタは丸く、半月形で、緑色、石灰質。藻食性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや遮蔽された海岸の潮間帯中部から下部で砂の堆積した転石下などに生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

人間による採集と海岸環境の改変が生存を脅かす要因と考えられる。生息域での海岸環境の改変には十分な注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

和田恵次ら, 1996; Nakano, T. et al., 2007.



(執筆: 黒住耐二)

イシマキガイ

Clithon retropictus

オキナエビス目
アマオブネ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 10mm、殻径 15mm 程度の球形、螺層は極めて小さく、通常侵食され、体層のみとなる。殻口は半月状で、内唇に弱い歯を持つ。殻表の三角斑は、底辺部が黒褐色に彩色される。フタは平板で、石灰質。岩等の表面の藻類を摂食する。円形の卵嚢を岩などに産み、両側回遊を行って、河口域に着底し、河川を遡上し、成長する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

河口汽水域から淡水域の岩礫底に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

着底を妨げるような河口域の改変、河川流量減少による河口閉塞、河川の水質汚染などが生存を脅かす要因と考えられる。これらを回避することが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1930; 奥谷喬司, 2000.



(執筆: 黒住耐二)

マルアマオブネ

Nerita squamulata

オキナエビス目
アマオブネ科

小笠原諸島 

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高・殻径 20mm 程度の球形、螺層は小さく、わずかに突出する。殻口は半月状で、内唇中央部が窪み、ここに弱い 3 歯を持つ。殻表にはやや不規則な螺肋が比較的密に存在する。微顆粒がフタの表面を覆う。主にわずかに淡水のしみ出すような潮間帯の転石域に生息する。

【分布の概要】

小笠原諸島、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや遮蔽された潮間帯中部から下部の転石海岸に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質汚染が生存を脅かす要因と考えられる。水質汚染を回避するとともに、淡水の流入確保や遮蔽された環境の保護を行うことが望ましい。

【関連文献】

Fukuda, H., 1993; 奥谷喬司, 2000.

(執筆: 黒住耐二)



フネアマガイ

Septaria procellana

オキナエビス目
フネアマガイ科

小笠原諸島 

環境省

【形態・生態】

殻は、殻幅 20mm 程度の傘型で、殻口が極めて広くなる。殻頂は殻縁から突出するが浸食されていることも多い。内唇は突出せず直線的。殻表の斑紋はアジロ模様を基本として、多くの変異がある。フタは体内に埋在する。転石などの表面の藻類を摂食する。円形の卵嚢を石の表面に産み、両側回遊を行って、河口域に着底する。

【分布の概要】

小笠原諸島、本州、四国、九州、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

河口汽水域から淡水域の岩礫底に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

着底を妨げるような河口域の改変、河川流量減少による河口閉塞、河川の水質汚染などが生存を脅かす要因と考えられる。これらを回避することが望ましい。

【関連文献】

Fukuda, H., 1993; 奥谷喬司, 2000.

(執筆: 黒住耐二)



マキシジャマキサゴ

Ogasawarana arata

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島 

環境省 

【形態・生態】

殻は、殻高 3.0mm、殻径 5.1mm 程度のやや低いソロバン玉型。螺層および体層底面はやや膨らむ。滑層は弱い。体層周縁には弱い角を持つだけで、突出しない。体層まで、螺肋と毛状付属物が明らかである。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや風衝的な樹林の林床から生息が確認されており、ビロウ落葉下などから発見されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

智島、媒島、母島から記録されているが、ノヤギによる植生破壊が林床の乾燥化を進行させ、激減してしまった例もあり、樹林の保全と外来生物の分布拡大に注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1980; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ハハジマヤマキサゴ

Ogasawarana capsula

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 4.1mm、殻径 4.8mm 程度の腰高のソロバン玉型で、やや薄質。体層周縁は弱く角張るが、丸い。螺層と体層底面の膨らみは弱い。滑層は薄く、弱い。殻口はほとんど肥厚せず、弱く反転する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に湿性林の林床の土壌塊の間に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

林床の乾燥化が生存を脅かす要因と考えられる。林床の乾燥化を防ぐとともに、樹林の保全と外来生物の分布拡大防止を行うことが望ましい。

【関連文献】

富山清升, 1991; 東正雄, 1995.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆者: 黒住耐二)

チチジマヤマキサゴ

Ogasawarana chichijimana

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.4mm、殻径 7.2mm 程度の扁平なソロバン玉型、やや薄質。螺層はほぼ直線的で、ほとんど膨らまない。体層底面の膨らみは弱い。滑層は弱い。体層周縁は強く角張るが、突出した竜角にならない。殻表には、明瞭な 4 列の螺肋状の毛状付属物がある。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林の林床に生息していたと推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前に採集された標本に基づいて記載されたが、戦後の調査では確認されておらず、絶滅したと考えられている。

【関連文献】

黒田徳米, 1930; 湊宏, 1980.

No image

(執筆者: 黒住耐二)

ナカノシマヤマキサゴ

Ogasawarana comes

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 1.9mm、殻径 2.9mm 程度の低いソロバン玉型で、やや硬質。螺層と体層底面はやや膨らむ。体層周縁は丸い。殻口縁は肥厚する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に乾性林の落葉下の土壌塊の間に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、西島、媒島、父島から記録があるが、いくつかの島で、戦後は生息が確認されていない。主な分布地である島では、ノヤギによる植生破壊は免れたが、外来捕食者による影響が生存を脅かす要因となっている。外来捕食者の持ち込み防止と駆除を行うことが望ましい。

【関連文献】

富山清升, 1992; 千葉聡, 2009.

No image

(執筆者: 黒住耐二)

アニジマヤマキサゴ

Ogasawarana discrepans

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

CR-EN

環境省

CR-EN

【形態・生態】

殻は、殻高 2.7mm、殻径 4.6mm 程度のやや腰高のソロバン玉型で、硬質、堅固。螺層および体層底面はやや膨らむ。滑層はやや強い。体層周縁は竜角状に突出する。殻口縁は肥厚し、反転する。次体層まで、螺肋が認められるが、体層では消失する。殻色は、赤褐色から黄白色まで幅広い変異を示す。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

尾根部の樹林、海岸林などの落葉下、島によっては外来植物のモクマオウ林の林床にも生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多くの島から記録されていたが、海岸林の改変や外来捕食者の影響により激減している。これらの脅威を取り除くことが望ましい。

【関連文献】

富山清升, 1991; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)



1mm © 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ソロバンダヤマキサゴ

Ogasawarana habeii

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3mm、殻径 3.7mm 程度の腰高の菱形、やや薄質。体層底面の膨らみは弱い。滑層は肥厚する。殻口は肥厚するが、反転しない。体層周縁はやや角張るが、竜角はない。殻表は平滑で、淡黄褐色。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。石灰岩地の湿性林の林床に生息していたと推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は死殻しか採集されておらず、絶滅した可能性が高い。ただし、最近の詳細な調査によってこれまで絶滅と考えられていたいくつかの種の再発見があり、本種も再発見されることが考えられる。

【関連文献】

湊宏, 1980; 黒住耐二, 1988.

No image

(執筆: 黒住耐二)

ヒラセヤマキサゴ

Ogasawarana hirasei

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

CR-EN

環境省

CR-EN

【形態・生態】

殻は、殻高 2.8mm、殻径 6.1mm 程度の扁平なソロバン玉型、やや薄質。体層底面はやや膨らむ。滑層はやや弱い。体層周縁に突出した竜角を有する。殻口は肥厚し、反転する。殻表に細い螺肋を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

石灰岩地の湿性林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

これまで母島の極めて限られた地域のみで記録があり、陸生ウズムシ類の分布や入域人口の増加などにも注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009..

(執筆: 黒住耐二)



1mm © 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ハゲヨシワラヤマキサゴ

Ogasawarana metamorpha

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 4.5mm、殻径 7.3mm 程度のやや腰高のソロバン玉型、やや薄質。体層はやや膨らむ。滑層は弱い。体層周縁は弱く角張る。殻表は平滑で、やや光沢を有し、黄褐色の殻皮を有する。現在までのところ、殻皮上に螺肋状の毛状付属物は認められていない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

湿性林に生息すると思われる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

これまで死殻しか確認されていなかったが、2010 年に生貝が確認された。この島では、現在は戦前のような大規模な樹林改変はなくなっており、今後も樹林の伐採などを避けること、また、外来捕食者の排除にも留意することが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1930; 湊宏, 1980.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

コガラヨシワラヤマキサゴ

Ogasawarana microtheca

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

殻は、殻高 2.2mm、殻径 3.7mm 程度の扁平なソロバン玉型、やや薄質。螺層の膨らみは弱く、体層底面はやや膨らむ。滑層は弱い。体層周縁は角張らず、丸みを帯びる。殻口縁は反転する。殻表は平滑で、光沢を有する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸林などの落葉下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

媒島、母島、向島、平島、姪島、姉島、妹島から記録されているが、絶滅と考えられている島も存在する。現時点では残存している島での生息地の改変は比較的少なく、今後も現在の自然度の高い状況を維持し、外来捕食者の蔓延や持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

黒住耐二, 1988; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

スベスベヤマキサゴ

Ogasawarana nitida

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 2.3mm、殻径 4.0mm 程度の低いソロバン玉型で、薄質、半透明。螺層はほぼ平坦で、体層底面はやや膨らむ。滑層は弱い。体層周縁は鈍い角を有するだけで、丸い。殻口縁は肥厚せず、弱く反転する。殻色は、コハク色で、光沢を有する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に湿性林の樹上、オガサワラビロウなどの葉裏に生息する。

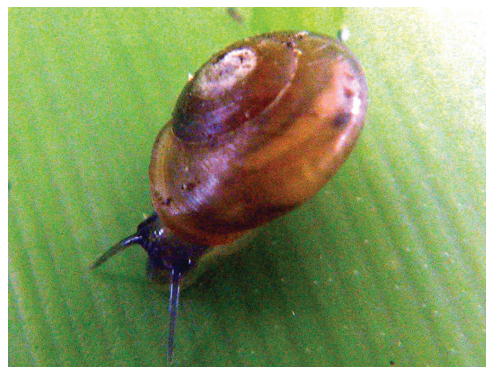
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、母島から記録されており、主に湿性林に生息しているため、生息地の樹林の改変を回避することや、外来捕食者の侵入に注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1980; 富山清升, 1991.

(執筆: 黒住耐二)



テツボウヤマキサゴ

Ogasawarana obtusa

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島 **CR+EN**

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 2.7mm、殻径 5.0mm 程度の扁平なソロバン玉型。螺層・体層底面の膨らみは弱く、滑層はやや強い。体層周縁は弱く角張るが、突出しない。殻口縁は肥厚し、反転する。殻表は平滑。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

自然度の高い樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は兄島のみで確認されており、クマネズミなどの外来動物による捕食が生存を脅かす要因である可能性がある。ネズミ類の駆除や移入の防止を行うことが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S. et al., 2008; 千葉聡, 2009.

No image

(執筆: 黒住耐二)

オガサワラヤマキサゴ

Ogasawarana ogasawarana

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島 **VU**

環境省

VU

【形態・生態】

殻は、殻高 2.9mm、殻径 5.0mm 程度のやや扁平なソロバン玉型。螺層の膨らみは弱く、体層底面はやや膨らむ。滑層はやや強い。体層周縁は角張るが、竜角状に突出しない。殻口縁は肥厚し、反転する。体層上面に 5～6 本の螺肋がある。殻色は赤褐色。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸林などの落葉下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島、姪島、妹島の比較的広範囲な地域から記録されていたが、現在では分布域が減少している。その分布域内ではまだ生息が確認されているが、遊歩道などの設置に伴う植生の改変や外来捕食者の移入によって個体数が減少している。外来捕食者の駆除や移入の防止を行うことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.



(執筆: 黒住耐二)

カドオガサワラヤマキサゴ

Ogasawarana optima

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島 **CR+EN**

環境省 **CR+EN**

【形態・生態】

殻は、殻高 3.6mm、殻径 5.9mm 程度のやや腰高のソロバン玉型、硬質で、堅固。螺層および体層底面の膨らみは弱い。滑層は明らかで、やや強い。体層周縁に突出した強い竜角を巡らす。殻口は肥厚し、反転する。次体層以前まで、螺肋と毛状付属物が明らかで、体層ではこれらが消失することがある。色彩では、赤褐色、橙色、黄白色と変異が大きい。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

尾根部から谷部までの落葉下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、兄島、弟島、西島、姉島から記録されていたが、樹林の伐採などにより激減してしまい、最近ではクマネズミの捕食で個体数減少の著しい島もある。他の外来捕食者の影響もあり、これらの外来捕食者の駆除や移入の防止を行うことなどが望ましい。

【関連文献】

上島励, 1989; 富山清升, 1992.

No image

(執筆: 黒住耐二)

アカビシヤマキサゴ

Ogasawarana rex

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 5mm、殻径 9mm 程度のやや扁平なソロバン玉型、やや硬質で、堅固。体層底面の膨らみは弱い。滑層は明らかで、やや強い。体層周縁に突出した強い竜角を巡らす。殻表は平滑で、赤褐色の殻皮を有する。現在までのところ、殻皮上に螺旋状の毛状付属物は認められていない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林の林床に生息していたと推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前には生貝も確認されていたようであるが、戦後は生貝が確認されていない。樹林の伐採による乾燥化が減少要因になったと推測される。

【関連文献】

黒田徳米, 1930; 湊宏, 1980.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆者: 黒住耐二)

ヨシワラヤマキサゴ

Ogasawarana yoshiwarana

オキナエビス目
ヤマキサゴ科

小笠原諸島 CR+EN

環境省 CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 3.4mm、殻径 5.5mm 程度のやや高いソロバン玉型。螺層および体層底面はやや膨らむ。体層周縁に弱い角を持つ。殻口は肥厚し、反転する。殻表に多数の細い螺旋を持つ。殻皮は淡黄褐色。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

急峻な地形に発達する風衝林の林床に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は母島の隔離された地形のところに残存しており、この地域での植生の改変や外来捕食者の侵入に注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1980; Chiba, S. et al., 2007.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆者: 黒住耐二)

キビオカチグサガイ

Acmella minima

ニナ目
カワザンショウガイ科

小笠原諸島 VU

環境省 VU

【形態・生態】

殻は、殻高 2.4mm、殻径 1.4mm 程度のやや低い円錐形で、殻頂は丸みを帯び、螺層は少し膨れる。やや厚質・堅固。臍孔はわずかに開く。殻表はほぼ平滑で、強い光沢がある。半透明白色。地上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

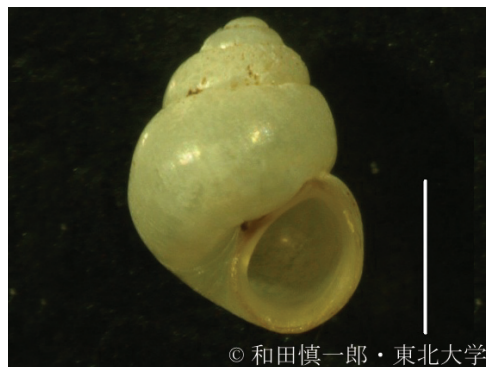
湿性林の林床に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸部から内陸部まで広く分布するものの、一部の地域では個体数の減少が激しい。樹林の乾燥化がその要因と考えられる。樹林の改変に注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

波部忠重, 1942; Fukuda, H. & T. Mitoki, 1995.



© 和田慎一郎・東北大学

(執筆者: 黒住耐二)

キバオカチグサガイ

Conacmella vagans

ニナ目

カワザンショウガイ科

小笠原諸島 

環境省 

【形態・生態】

殻は、殻高 6.2mm、殻径 3.2mm 程度の高い円錐形で、殻頂は尖り、螺層は膨らまない。やや薄質・堅固、軸唇はやや肥厚し、垂直、臍孔はわずかに存在。体層周縁に弱く鈍い角を持つ。殻表は平滑。半透明で殻頂部はわずかに褐色に彩色される。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

湿性林の石灰岩地に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島の石灰岩地で記録されており、戦後は生貝が確認されていなかったが、2011年に生貝が確認された。

【関連文献】

波部忠重, 1942; 千葉聡ら, 2012.



1mm © 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆者: 黒住耐二)

カドカドガイ属の一種

Ditropisena sp.

ニナ目

カワザンショウガイ科

小笠原諸島 

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 1.2mm、殻径 1.9mm 程度のコマ型で、体層に 2 本の鋭い稜を有し、特に周縁部のは突出する。殻は厚質・堅固。殻表には成長肋はやや密で明瞭。臍孔は広く開き、その周囲にも 1 本の稜が認められる。南西諸島に分布するミニカドカドに極めて類似する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸崖下の落葉の堆積する飛沫帯の礫間に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

少数の島で確認されており、海岸部の改変による生息地の消失や土砂の堆積が生存を脅かす主な要因と考えられる。これらを回避することが望ましい。

【関連文献】

黒住耐二, 1988; 和田恵次ら, 1996.



1mm

所蔵: 千葉県立中央博物館

(執筆者: 黒住耐二)

ブタハマチグサガイ

Paludinella sp.

ニナ目

カワザンショウガイ科

小笠原諸島 

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 2.5mm、殻径 1.9mm 程度の円錐形で、厚質堅固、臍孔は閉じる。殻頂部に弱い螺肋が存在し、成長肋も存在するが、ほぼ平滑。濃いオレンジ色。地上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸の潮間帯上部から飛沫帯の転石下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸部の改変による生息地の消失や土砂の堆積によって微細な生息環境が変わってしまう可能性があり、これらを回避することが望ましい。

【関連文献】

Fukuda, H., 1993; 千葉聡, 2009.

No image

(執筆者: 黒住耐二)

オガサワラカワニナ

Stenomelania boninensis

ニナ目

トウガタカワニナ科

小笠原諸島 **CR+EN**

環境省 **CR+EN**

【形態・生態】

殻は、大成すると殻高 30mm、殻径 9mm 程度の細長い塔型で、殻表に密な螺溝をめぐらし、時に弱い縦肋も認められる。体層は張り出さず、周縁も緩やかな曲線となる。島しょや河川間で、サイズや彫刻に変異が認められる。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

河口域から、その上流側に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修などにより下流域の個体群に減少が認められ、外来種のヌノメカワニナとの競合も記録されている。また、小河川では樹林の改変により流量の減少も想定される。これらの要因に注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

増田修・内山りゅう, 2004; 佐々木哲朗ら, 2009.

(執筆: 黒住耐二)



ヌノメハマシイノミガイ

Melampus granifer

オカミミガイ目

オカミミガイ科

小笠原諸島 **EX**

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 11mm、殻径 6mm 程度で、長卵形、螺塔は低く、縫合は窪まない。殻表に密な螺肋をめぐらし、弱い縦肋により布目状となる。内唇と軸唇に 1 歯を持つ。殻色は明濁褐色。臍穴はない。

【分布の概要】

小笠原諸島 (絶滅)、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。遮蔽された河口干潟で死殻が確認されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

1985 年に清瀬河口域で死殻が確認されているが、生貝は発見されていない。他地域では、潮間帯上部で乾燥しにくい環境の転石下に生息するので、護岸造成などによる生息可能な環境の消失を避けることが望ましい。また、河口閉塞、水質汚染にも注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

Fukuda, H., 1994; 奥谷喬司, 2000.

(執筆: 黒住耐二)



マダラヒラシイノミガイ

Pythia pantherina

オカミミガイ目

オカミミガイ科

小笠原諸島 **EX**

環境省

NT

【形態・生態】

殻は、殻高 25.0mm、殻径 15.5mm 程度で、楕円形、背腹に扁平、螺塔はやや高く、側面は直線的。縫合下に刻み目がある。殻口内外唇に多くの歯を持つ。殻色は濃褐色で、まだら模様になる。臍穴はない。小笠原の本種は、最初クロヒラシイノミとして記録されたが、後に本種に再同定された。

【分布の概要】

小笠原諸島 (絶滅)、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。他地域では、やや遮蔽された海岸の潮間帯差異上部から飛沫帯の打上りター層下に生息するため、そのような環境に生息していたと推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

戦前に採集された標本が複数の博物館に残存しているのみで、戦後の調査では死殻も確認されていない。

【関連文献】

Fukuda, H., 1994; 奥谷喬司, 2000.

(執筆: 黒住耐二)



オガサワラオカモノアラガイ

Boninosuccinea ogasawarae

マイマイ目
オカモノアラガイ科

小笠原諸島 **CR-EN**

環境省 **CR-EN**

【形態・生態】

殻は、殻高 10mm、殻径 8mm 程度の楕円形で、淡黄褐色、極めて薄質、螺層は小さい。殻表に弱く不明瞭で粗な螺状溝を持つが、点刻列とならない。生時には、外套膜で殻の周縁部を包む。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に標高の高い場所の雲霧林に生息し、樹上の葉裏で見つかることが多い。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の改変による乾燥化、外来捕食者の蔓延や持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1977; 東正雄, 1995.



5mm

所蔵：千葉県立中央博物館

(執筆：黒住耐二)

テンスジオカモノアラガイ

Boninosuccinea punctulispira

マイマイ目
オカモノアラガイ科

小笠原諸島 **CR-EN**

環境省 **CR-EN**

【形態・生態】

殻は、殻高 14.0mm、殻径 10.5mm 程度の長円形で、淡紅褐色、極めて薄質、螺層は高く明瞭。殻表に弱いが密な点刻列を持つ。生時には、外套膜で殻の周縁部を包まない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に標高の高い場所の樹林に生息し、樹上の葉裏で見つかることが多い。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の伐採による林内の乾燥化により個体数が減少した上に、外来種のニューギニアヤリガタウズムシにより絶滅した島もある。樹林の改変による乾燥化、外来捕食者の蔓延や持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1977; 東正雄, 1995.



(執筆：黒住耐二)

イオウジマノミガイ

Elasmias kitaiwojimanum

マイマイ目
ノミガイ科

小笠原諸島 **VU**

環境省 **VU**

【形態・生態】

殻は、殻高 2.7mm、殻径 2.0mm 程度の球形、体層が大きく、薄質、半透明淡黄白色。殻表はほぼ平滑で光沢を持つ。軸唇は垂直で、弱い歯を持つ。臍孔はない。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

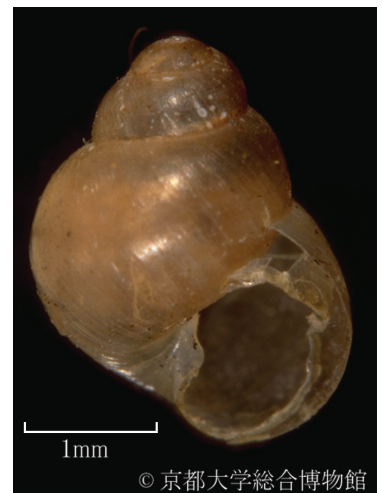
主に標高の高い場所の湿性林に生息し、樹上の葉裏で見つかることが多い。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の伐採による林内の乾燥化や一部の島では外来種のウズムシ類による捕食が挙げられる。樹林の改変による乾燥化、外来捕食者の蔓延や持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.



1mm

© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆：黒住耐二)

トウガタノミガイ

Lamellidae biplicata

マイマイ目
ノミガイ科

小笠原諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

殻は、殻高 3.5mm、殻径 1.7mm 程度の高い円錐形、体層は殻高の 1/2 程度、薄質、半透明淡黄褐色、殻表に光沢を持つ。臍孔はなく、軸唇はほぼ垂直で、弱くねじれる。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島

【小笠原諸島における生息環境】

自然度の高い樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、母島でのみ確認されており、内陸部の植生の改変や外来種の影響により、個体数が減少する可能性がある。これらの脅威を取り除くことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡ら, 2012.

(執筆: 黒住耐二)



1mm © 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ヒトハノミガイ

Lamellidae monodonta

マイマイ目
ノミガイ科

小笠原諸島

DD

環境省

DD

【形態・生態】

殻は、殻高 3.2mm、殻径 1.9mm 程度の円錐形、体層は殻高の 2/3 を占め、薄質、半透明淡黄褐色、殻表に光沢を持つ。臍孔はなく、軸唇は斜位で、ねじれはかなり弱い。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

自然度の高い樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島から記録されており、分布域は広くはないようである。内陸部の植生の改変や外来種の影響により、個体数が減少する可能性がある。これらの脅威を取り除くことが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1930; 千葉聡ら, 2012.

(執筆: 黒住耐二)



1mm

ナカダノミガイ

Lamellidae nakadai

マイマイ目
ノミガイ科

小笠原諸島

DD

環境省

DD

【形態・生態】

殻高 3.3mm、殻径 1.5mm 程度の細長い塔型、体層は殻長の 1/2 未満、螺塔の膨らみは弱い。殻は薄質、淡黄褐色、殻表は平滑で弱い光沢を持つ。体層内部に縦肋がない。軸唇は垂直でねじれはやや強い。臍孔はない。内唇に弱い 1 歯がある。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島

【小笠原諸島における生息環境】

自然度の高い樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、南硫黄島でしか確認されておらず、父島では最近の調査でも発見されていない。樹林の改変に注意することが望ましい。

【関連文献】

岩下典弘, 1978; 千葉聡ら, 2012.

(執筆: 黒住耐二)



1mm

© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

オガサワラノミガイ

Lamellidae ogasawarana

マイマイ目
ノミガイ科

小笠原諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

殻高 2.4mm、殻径 1.4mm 程度の長卵形、体層は殻長の 1/2 以上、螺塔はやや膨らむ。殻は薄質、黄褐色、殻表は平滑で光沢は弱い。体層内部に縦肋を有する。軸唇は垂直でねじれは弱い。内唇にやや強い 1 歯がある。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸部から内陸部までの自然度の高い樹林に生息し、林床から樹上の葉裏で確認される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伐採を含む樹林の改変や外来種の捕食が生存を脅かす要因と考えられる。林床の乾燥化、外来捕食者の蔓延や持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

平瀬信太郎・瀧庸, 1951; 千葉聡ら, 2012.



(執筆: 黒住耐二)

トライオンノミガイ

Tornatellides tryoni

マイマイ目
ノミガイ科

小笠原諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

殻は、殻高 3.0mm、殻径 1.9mm 程度の高い円錐形で、体層は殻長の 1/2 以上で膨らみ、螺塔はやや膨らむ。殻は薄質、淡黄褐色、殻表は平滑で弱い光沢がある。内唇に 1 歯を持つ。軸唇は垂直で反転し、広い。臍孔はやや広く開く。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸部から内陸部までの自然の残る樹林に生息し、林床から樹上の葉裏で確認される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

伐採を含む樹林の改変が生存を脅かす大きな要因と考えられる。

【関連文献】

富山清升・黒住耐二, 1992; 東正雄, 1995.



(執筆: 黒住耐二)

ボニンスナガイ

Gastrocopta boninensis

マイマイ目
キバサナギガイ科

小笠原諸島

NT

環境省

NT

【形態・生態】

殻は、殻高 2.1mm、殻径 1.1mm 程度の長卵形で、白色半透明、螺層は殻頂に向かって急に細くならず、体層と次体層の径はほぼ同等。縫合は比較的浅い。内唇の強い 3 歯のうち、軸唇側の 1 歯や他より短い。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に海浜部の灌木林の林床に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

海岸部の改変により生息地の消失や変化が生じる可能性があり、植生の改変を避けることが望ましい。また、類似の外来種による本種との置き換わりも懸念されている。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2012.



(執筆: 黒住耐二)

提供の写真を編集レイアウトしました

チチジマスナガイ

Gastrocopta chichijimana

※備考 (p.610)

マイマイ目
キバサナギガイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高 2.3mm、殻径 1.5mm 程度の高い円錐形で、白色半透明、螺層は殻頂に向かって急に細くなり、体層と次体層の径では体層の方が大きい。縫合はやや深い。内唇の強い 3 歯は、ほぼ同長。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸部から離れた地域の樹林の林床に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在は母島からのみ確認されているだけであり、今後他の島からも確認される可能性もある。林床の乾燥化、外来捕食者の定着や蔓延を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡ら, 2012.



© 京都大学総合博物館

(執筆: 黒住耐二)

提供の写真を編集レイアウトしました

オガサワラスナガイ

Gastrocopta ogasawarana

※備考 (p.610)

マイマイ目
キバサナギガイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高 1.8mm、殻径 1.1mm 程度の長卵形で、小形、白色半透明、螺層は殻頂に向かって緩やかに細くなり、体層と次体層の径はほぼ同等。縫合はやや深い。殻口外唇は張り出さない。内唇の強い 3 歯は、ほぼ同長。チチジマスナガイの亜種や同種とされることもある。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林の林床に生息していたと推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

原記載以降、正確な確認記録はなく、他種と混同されていた可能性がある。ただし、今後の研究により、再発見される可能性もある。湿性な環境を好む可能性が高く、林床の乾燥化に注意することが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1930; 千葉聡ら, 2012.

No image

(執筆: 黒住耐二)

エリマキガイ

Ptychalaea dedecora dedecora

※備考 (p.610)

マイマイ目
キバサナギガイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高 1.5mm、殻径 0.9mm 程度の卵形で、濃赤褐色、殻表には弱い成長肋が認められる程度で平滑に見える。殻口の後方に明瞭な隆起を持つ。縫合は浅い。殻口内に多くの歯を持ち、外唇の上腔壁の位置に溝がある。地上性。南西諸島のものは、別種の可能性もある。

【分布の概要】

小笠原諸島、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

海岸部から内陸部までの比較的自然度の高い樹林の林床で確認される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

智島、兄島、父島、母島、妹島から確認されているものの、個体数は決して多くはない。林床の乾燥化、外来捕食者の定着や蔓延を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.



© 京都大学総合博物館

(執筆: 黒住耐二)

提供の写真を編集レイアウトしました

タマゴナリエリマキガイ

Ptychalaea dedecora tamagonari

※備考 (p.610)

マイマイ目

キバサナギガイ科

小笠原諸島

VU

環境省

VU

【形態・生態】

殻は、殻高 1.7mm、殻径 1.1mm 程度の略球形で、良く膨らむ。殻口外唇縁は体層側面より内側に位置する。エリマキガイと識別できないという見解や別種であるという考えもある。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

分布記録が少なく、詳細は明らかではないが、内陸部の湿性林の林床に生息すると推測される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、南硫黄島から記録されており、父島では再発見されておらず、過去の樹林の伐採により激減したと考えられる。残存する南硫黄島では、林床の乾燥化が生存を脅かす要因と考えられる。樹林の乾燥化を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

岩下典弘, 1978; 千葉聡, 2009.

(執筆: 黒住耐二)



1mm

© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ハハジマキセルモドキ

Boninena callistoderma

マイマイ目

キセルガイモドキ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 11.5mm、殻径 6.5mm 程度で、薄質、螺塔はやや高く、体層と螺層はやや膨らむ。殻皮は帯緑褐色。殻表に弱い顆粒状の螺肋を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

比較的標高の高い場所の樹林の樹上、特に葉の裏面に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、父島、母島、向島、姉島、妹島で生息が確認されており、外来捕食者のニューギニアヤリガタリクウズムシの影響を受けている島も存在する。これらの外来捕食者の影響を軽減することや様々な行為による植生の改変、樹林の乾燥化を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.

(執筆: 黒住耐二)



1mm

© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ヒラセキセルモドキ

Boninena hiraseana hiraseana

マイマイ目

キセルガイモドキ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 9mm、殻径 5mm 程度で、硬質、殻径が大きく、螺塔は低く、卵円形、螺層の膨らみは弱い。殻表に不明瞭な点刻列を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや乾性な樹林の樹上に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

髯島、媒島から記録されているが、髯島ではノヤギによる植生破壊や林床の乾燥化などが原因で絶滅したと考えられる。媒島ではノヤギの排除が実施されたことから、今後は外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1945; 千葉聡, 2009.

(執筆: 黒住耐二)



1mm

© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

チヂマキセルモドキ

Boninena hiraseana chichijimana

マイマイ目

キセルガイモドキ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 9.0mm、殻径 4.8mm 程度で、硬質、螺塔はやや高く、長円形。螺層はやや膨らむ。殻皮は、栗褐色か帯緑褐色。殻表に明瞭な点刻列を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

比較的標高の高い場所の樹林（特に乾性低木林）の樹上に生息し、葉裏で見つかることが多い。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

弟島、兄島、西島、父島、母島、妹島から記録されていたが、西島、母島では絶滅したと考えられている。やや乾燥した樹林を好むことから、開発の行われやすい場所での樹林の伐採などの影響を受けているものと思われる。また、外来捕食者のニューギニアヤリガタリクウズムシの捕食も考えられ、その蔓延を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1945; 湊宏, 1991.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

オガサワラキセルモドキ

Boninena ogasawarae

マイマイ目

キセルガイモドキ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 13.0mm、殻径 5.2mm 程度で、薄質、細長く、螺塔は高く、螺層の膨らみは弱い。殻表に密な点刻列を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

比較的標高の高い場所の樹林（特に乾性低木林）の樹上に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在でも兄島、母島、向島で生息が確認されている。残存する生息地での開発や樹林の伐採、外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

黒田徳米, 1945; 富山清升, 1991.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ヒメカドエンザガイ

Hirasea acutissima acuta

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 1.5mm、殻径 3.5mm 程度で、この属としては中形で、螺塔は低いが、やや高まり、円盤形、周縁に強い竜角を持つ。体層底面の膨らみは弱い。殻口縁は単純で反転せず、肥厚は強い。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

現在では乾性林の林床から生息が確認されている。

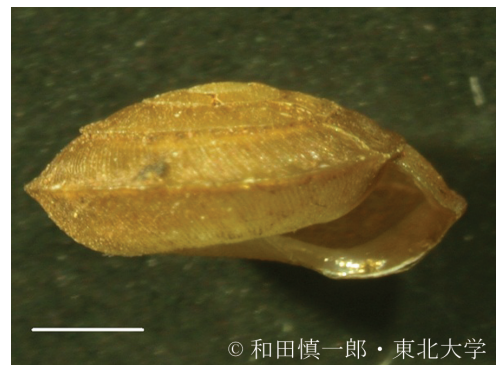
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島、平島、姪島、姉島、妹島から記録されているが、絶滅したと考えられている島もある。現時点では、残存する島の改変は比較的小さいため、今後も現在の自然度の高い状況を維持し、外来捕食者の定着や蔓延を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

富山清升・黒住耐二, 1992; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)



© 和田慎一郎・東北大学

カドエンザガイ

Hirasea acutissima acutissima

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 **CR+EN**

環境省 **CR+EN**

【形態・生態】

殻は、殻高 2mm、殻径 4mm 程度で、この属としては中形で、円盤形、螺塔は低く、ほぼ扁平、周縁に強い竜角を持ち、突出する。体層底面はやや膨らむ。殻口縁は単純で反転せず、肥厚は強い。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

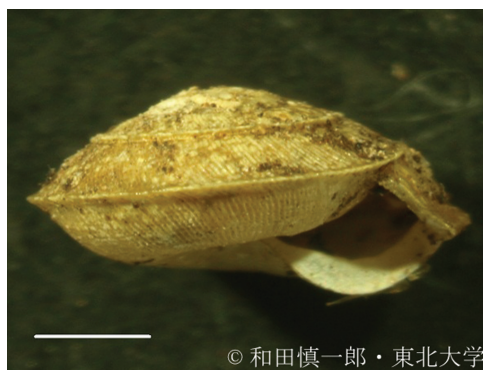
現在では風衝林の広葉樹落葉下から生息が確認されている。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島から記録されており、絶滅したと考えられてきたが、近年再発見された。海崖上の風衝林で確認されている場合もあり、生息地の改変を回避し、様々な外来捕食者の影響にも注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; Chiba, S. et al., 2007



© 和田慎一郎・東北大学

(執筆: 黒住耐二)

ナカクボエンザガイ

Hirasea biconcava

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 **EX**

環境省 **EX**

【形態・生態】

殻は、殻高 2.2mm、殻径 6.0mm 程度で、この属としては大形で、扁平、上面は窪む。体層は丸い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たない。臍穴は狭いが、開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。木性シダから得られた記録があることから、樹上性であった可能性があり、湿性林に生息していたと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ記録されていたが、日本復帰後はまだ生貝が確認されていない。

【関連文献】

大山桂, 1940; 東正雄, 1995.



(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬與一郎, 1907a.

チチジマエンザガイ

Hirasea chichijimana

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 **CR+EN**

環境省 **CR+EN**

【形態・生態】

殻は、殻高 1.5mm、殻 3.0mm 程度で、この属としては小形で、螺塔はやや低く、亜菱形、縫合は浅いが、螺層はやや膨らみ、螺層数は少ない。周縁に突出した竜角を持つ。体層底面の膨らみは弱い。殻口縁は単純で反転せず、肥厚は強い。臍穴は狭く開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや標高の高い場所の樹林の落葉下の下部に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、父島、母島から記録されていたが、現在生息が確認されているのは兄島だけである。ここでは、谷部のみならず、尾根部の樹林でも確認されており、過去の樹林の伐採による乾燥化が生息に大きな影響を与えたと考えられる。残存している島での外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

富山清升, 1991; 東正雄, 1995.



(執筆: 黒住耐二)

提供の写真を編集レイアウトしました

マルクボエンザガイ

Hirasea diplomphalus diplomphalus

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 2mm、殻径 4mm 程度で、この属としては小形で、やや球形、上面はやや狭く、窪み、その周囲に角を持つ。体層は丸い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たない。臍穴は開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に湿った谷部の樹林の落葉下の土壌層（ヒューマス層）に生息する。

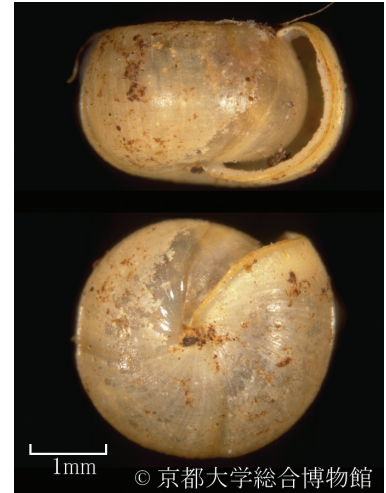
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、父島、母島から記録されているが、現在生息が確認されているのは兄島だけである。過去の樹林の伐採による林床の乾燥化が生息に大きな影響を与えたと考えられる。現在も生息している島において外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

Ueshima, R. & T. Kurozumi, 1988; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

ヒラクボエンザガイ

Hirasea diplomphalus latispira

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 2.8mm、殻径 3.8mm 程度で、この属としては小形で、やや扁平、上面は広く窪み、その周囲に角を持つ。体層は丸い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たない。臍穴は開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

樹林の落葉下の土壌層（ヒューマス層）の上部に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、父島から記録されているが、現在生息が確認されているのは兄島だけである。同属の他種と同じく、過去の樹林の伐採による林床の乾燥化が生息に大きな影響を与えたと考えられる。現在も生息している島での外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907a; 千葉聡, 2009.

(執筆: 黒住耐二)



© 千葉聡

コダマエンザガイ

Hirasea diplomphalus profundispira

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 2.8mm、殻径 3.5mm 程度で、この属としては小形で、球形、上面は窪む。体層は丸い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たない。臍穴は広く開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。類似した殻形態を持つ同属の種が主に土壌層（ヒューマス層）に生息することから、本亜種も同様な環境に生息していた可能性が高い。

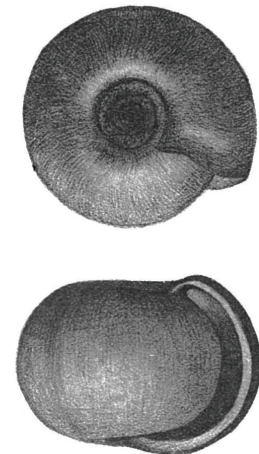
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907a; 黒田徳米, 1930.

(執筆: 黒住耐二)



出典: 平瀬興一郎, 1907a.

コシダカエンザガイ

Hirasea eutheca

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.5mm、殻径 4.0mm 程度で、この属として中形。螺塔はやや高く、体層は丸く、膨れる。内唇滑層はやや薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、肥厚部を持たない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。殻高の低い同属の他種が落葉層中部に生息するので、本種も同様な環境に生息していた可能性もある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907a; 黒田徳米, 1930.



出典: 平瀬興一郎, 1907a.

(執筆: 黒住耐二)

ソコカドエンザガイ

Hirasea goniobasis

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 2mm、殻径 4mm 程度で、この属としては小形で、螺塔が高く、螺層数が多く、螺層は階段状となる。周縁に竜角を持ち、体層下面は角張る。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たないが、歯状突起を有する。臍穴は狭く開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。同属の他種の生息環境から推測すると、湿性林に生息していた可能性がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907b; 黒田徳米, 1930.



出典: 平瀬興一郎, 1907b.

(執筆: 黒住耐二)

ツヤエンザガイ

Hirasea hypolia

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 2.5mm、殻径 5.5mm 程度で、この属としては大形で、螺塔は極めて低く、全体に扁平で、体層は角を持たないがやや角張る。内唇滑層はやや厚い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たない。臍穴は狭いが、開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

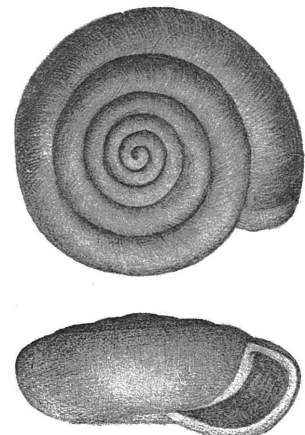
不明である。殻高の低い同属の他種が落葉層中部に生息するので、本種も同様な環境に生息していた可能性がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、母島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

黒住耐二, 1988; 東正雄, 1995.



出典: 平瀬興一郎, 1907a.

(執筆: 黒住耐二)

クチヒダエンザガイ

Hirasea insignis

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 3mm、殻 4mm 程度で、この属として中形。螺塔は低く、体層は丸く、角を持たない。内唇に顕著な肥厚部を持つ。殻口縁は単純で反転せず、外唇下部に明らかな肥厚部を持つ。臍穴は極めて狭いが、開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

風衝林の落葉下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

聳島から記録されており、両島ともノヤギによる植生破壊で樹林が分断化・乾燥化し、生息域が激減してしまっている。さらに、クマネズミの捕食も影響を考えられる。ノヤギの排除は行われており、植生回復を促進させると共に、外来捕食者の侵入阻止が不可欠である。

【関連文献】

平瀬興一郎 . 1907a; 千葉聡 , 2009.

(執筆: 黒住耐二)



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

オオエンザガイ

Hirasea major

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.3mm、殻径 6.7mm 程度で、この属としては大形で、低い菱形、螺塔はやや高く、螺層数は少なく、縫合は浅い。周縁に竜角を持つ。体層底面の膨らみは弱い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、肥厚は弱い。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。殻高の低い同属の他種が落葉層中部に生息するので、本種も同様な環境に生息していた可能性がある。

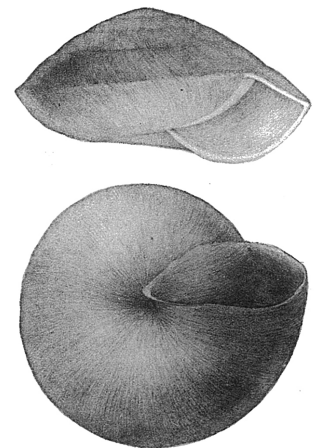
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎 . 1907b; 東正雄 , 1995.

(執筆: 黒住耐二)



出典: 平瀬興一郎, 1907b.

ナカタエンザガイ

Hirasea nesiotica nesiotica

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 2.5mm、殻 4.5mm 程度で、この属としては中形で、螺塔はやや低く、縫合は浅い。周縁に強い竜角を持つ。体層底面の膨らみは強い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、肥厚は強い。臍穴は狭く開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。殻高の低い同属の他種が落葉層中部に生息するので、本種も同様な環境に生息している可能性がある。

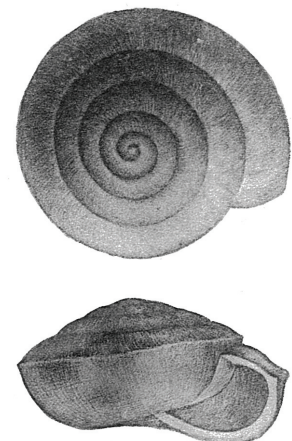
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、母島からのみ知られており、日本復帰後の生貝の確認はなかったが、2011年に母島の狭い範囲で生貝が確認された。

【関連文献】

湊宏 , 1978b; 東正雄 , 1995.

(執筆: 黒住耐二)



出典: 平瀬興一郎, 1907b.

ハタイエンザガイ

Hirasea nesiotica liobasis

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.5mm、殻 5.0mm 程度で、この属としては大形で、亜菱形、螺塔はやや低く、縫合は浅いが、螺層はやや膨らむ。周縁に竜角を持つが、突出しない。体層底面の膨らみは強い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、肥厚は強い。臍穴は狭く開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

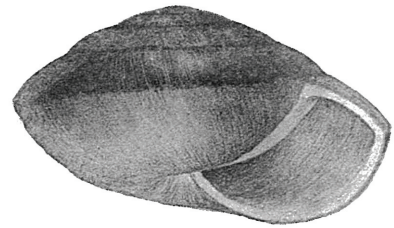
不明である。殻高の低い同属の種が落葉層中部に生息するので、本種も同様な環境に生息していた可能性がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907b; 東正雄, 1995.



出典: 平瀬興一郎, 1907b.

(執筆: 黒住耐二)

ヘタナリエンザガイ

※備考 (p.610)

Hirasea operculina

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 CR+EN

環境省 CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 2.3mm、殻径 7.0mm 程度で、この属としては大形で、極めて扁平な円盤形、周縁に強い竜角を持ち、突出する。殻口縁は単純で反転せず、やや肥厚する。ヒラヘタエンザガイとチチヒラエンザガイは、同種として取り扱った。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

比較的多様な樹林環境に生息する。落葉層の上層(落葉の裏面など)で発見される。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、西島、父島、母島から記録されている。海崖上の風衝林で確認されている地点もあり、これらの地域の改変を回避することが望ましい。また、様々な外来捕食者の影響にも注意を払うことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.



(執筆: 黒住耐二)

ヒラマキエンザガイ

Hirasea planulata

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 2.1mm、殻 3.2mm 程度で、この属としては小形で、やや扁平、上面は窪む。螺層数は多い。体層は丸い。内唇滑層は薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇は肥厚するが、下部に明らかな肥厚部を持たない。臍穴は狭いが、開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

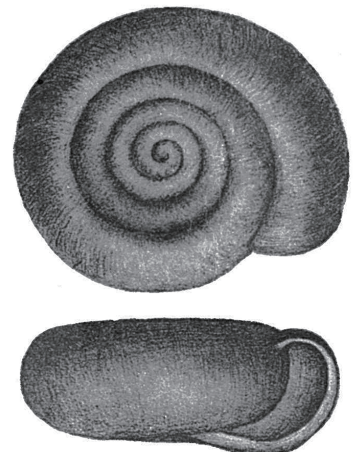
不明である。類似した殻形態を持つ同属の他種が主に土壌層(ヒューマス層)に生息することから、本種も同様な環境に生息していた可能性が高い。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ知られていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907a; 黒田徳米, 1930.



(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬興一郎, 1907a.

エンザガイ

Hirasea sinuosa

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3mm、殻径 6mm 程度で、この属としては大形。螺塔は低いが明瞭で、螺層数が多い。体層周縁は角張るが、丸い。臍孔は狭いが開く。内唇滑層はやや薄い。殻口縁は単純で反転せず、外唇下部に明瞭な肥厚部を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。殻高の低い同属の他種が落葉層中部に生息するので、本種も同様な環境に生息していた可能性がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

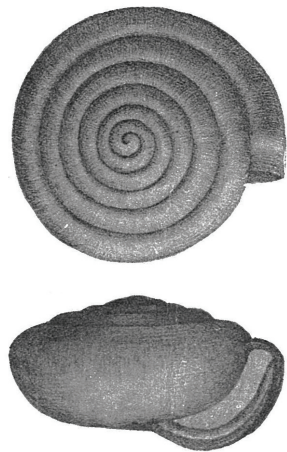
母島からのみ記録されていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907a; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬興一郎, 1907a.



エンザガイモドキ

Hirasiella clara

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3mm、殻径 3mm 程度で、高い円錐形、螺塔は高く、螺層側面は緩やかに殻頂に至り、やや膨らみ、螺層数が多い。体層周縁は丸い。淡褐色で、殻表はほぼ平滑で、光沢を持つ。殻口縁は単純で反転せず、外唇はわずかに肥厚する。臍穴は閉じる。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林に生息していた可能性が高い。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

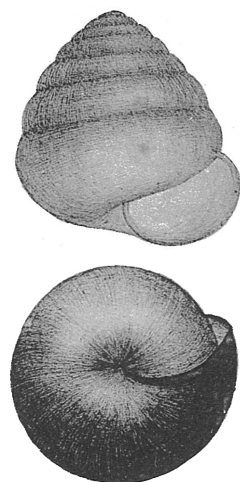
父島、母島からのみ記録されていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907c; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬興一郎, 1907c.



ハハジマヒメベッコウ

Lamprocystis hahajimana hahajimana

※備考 (p. 610)

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 VU

環境省 VU

【形態・生態】

殻は、殻高 3.8mm、殻径 7.0mm 程度で、螺塔は低いながら、平巻にはならない。螺層はほとんど膨らまず、縫合は極めて浅く、縁どりされる。臍孔は極めて狭く開く。半透明黄褐色で強い光沢を持ち、ほぼ平滑。外唇は肥厚しない。体層に稜を持たない。軸唇はやや肥厚する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に標高の高い場所の湿性林の林床に生息するが、過去には海岸部にも広く分布していた可能性がある。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

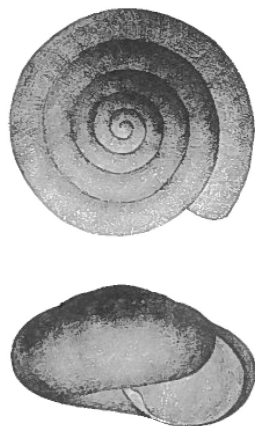
戦前の樹林の伐採などで激減し、現在では様々な樹林改変や外来捕食者の影響を受けている。これらの緩和策を講じることが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.

(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬興一郎, 1907d.



アニジマヒメベッコウ

Lamprocystis hahajimana anijimana

※備考 (p.610)

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

DD

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 2.2mm、殻径 4.4mm 程度で、名義タイプ亜種とは小形なこと、殻口縁で明瞭だが体層に弱い稜を有することによって識別されている。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。名義タイプ亜種の現在の分布から、湿性林の林床に生息すると考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島から記録されているが、今後の研究によっては、ハハジマヒメベッコウと別亜種にする必要がなくなる可能性もある。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907d; 黒田徳米, 1930.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆: 黒住耐二)

コハハジマヒメベッコウ

Lamprocystis hahajimana jejuna

※備考 (p.610)

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

DD

環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 2.9mm、殻径 4.9mm 程度で、名義タイプ亜種とは小形なこと、軸唇の肥厚が弱いことによって識別されている。体層に稜を持たない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。名義タイプ亜種の現在の分布から、湿性林の林床に生息すると考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

いくつもの島から記録されているが、今後の研究によっては、ハハジマヒメベッコウと別亜種にする必要がなくなる可能性もある。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907d; 前田和俊ら, 1987.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆: 黒住耐二)

アツクチハハジマヒメベッコウ

Lamprocystis hahajimana pachychilus

※備考 (p.610)

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

DD

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.0mm、殻径 4.8mm 程度で、名義タイプ亜種とはやや小形なこと、殻口内部外唇部が肥厚すること、殻高がやや高いことによって識別されている。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。名義タイプ亜種の現在の分布から、湿性林の林床に生息すると考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

向島から記録されており、近年の調査でその島から本種群が再発見されているものの、他の亜種との関係に関して詳細な検討が行われた後に、評価されるべきであると思われる。現在の植生状態を維持するとともに外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

平瀬興一郎, 1907d; 黒田徳米, 1930.



(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬興一郎, 1907d.

ボニンキビ

Liardetia boninensis

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 NT

環境省 NT

【形態・生態】

殻は、殻高 3.3mm、殻径 5.3mm 程度で、螺塔はやや高く、螺層は少し膨らみ、縫合は浅い。体層底面は膨らみ、周縁に鈍い角を持つが殻口部では不明瞭。半透明黄褐色で光沢を持ち、微細な螺脈がある。軸唇はやや垂直。小笠原諸島がタイプ産地であり、南西諸島から記録された本種に関しては、小笠原諸島産と同種かどうかの詳細な検討が必要とされる。

【分布の概要】

小笠原諸島、南西諸島

【小笠原諸島における生息環境】

二次林などの人為的かく乱の及んだ樹林にも生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

多くの島から記録があり、絶滅したと考えられている島は現時点ではない。ただし、過度の樹林の伐採は避けることが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1974; 東正雄, 1995.

(執筆: 黒住耐二)



マキシジベッコウ

Nipponochlamys lineolatus

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 CR+EN

環境省 CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 1.15mm、殻径 2.7mm 程度で、螺塔は低く、螺層は少し膨らみ、縫合は浅い。体層底面はやや膨らみ、周縁に鈍い角を持つ。臍孔は狭く開く。半透明黄褐色で光沢を持ち、螺脈がある。軸唇は肥厚せず、斜め。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや湿度の高い樹林の落葉下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

いくつかの島から記録されており、現在では少数の人為的かく乱の少ない島か、同様な地点で生息が確認されている。樹林の伐採による乾燥化と外来捕食者の持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

上島励, 1991; 富山清升, 1992.

(執筆: 黒住耐二)



オガサワラキビ

Trochochlamys ogasawarana

マイマイ目

ベッコウマイマイ科

小笠原諸島 EX

環境省 EX

【形態・生態】

殻は、殻高 5.3mm、殻径 5.8mm 程度で、高い円錐形、螺層側面は直線的で、膨らみは弱い、螺層数は多い。体層周縁には明瞭な角を有するが突出しない。殻表はほぼ平滑で光沢を持つ。淡黄褐色。殻口縁は単純で反転せず、内唇は薄く、垂直。臍穴はわずかに開く。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林の林床に生息していた可能性が高い。

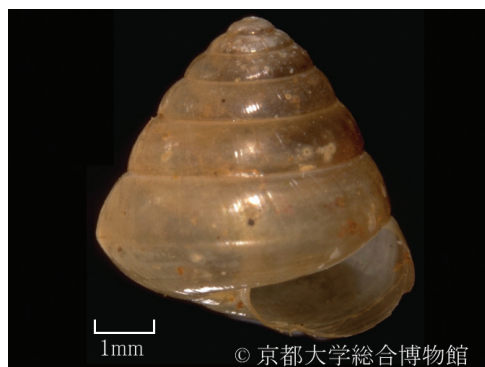
【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ記録されていたが、日本復帰後の生貝の確実な確認はできていない。

【関連文献】

東正雄, 1995; 千葉聡, 2009.

(執筆: 黒住耐二)



提供の写真を編集レイアウトしました

オガサワラベッコウ

Vitrinula chaunax

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

CR-EN

環境省

CR-EN

【形態・生態】

殻は、殻高 3.3mm、殻径 5.3mm 程度で、螺塔はやや高く、螺層は少し膨らみ、縫合は浅い。体層底面は膨らみ、周縁に鈍い角を持つが殻口部では不明瞭。半透明黄褐色で光沢を持ち、微細な螺脈がある。軸唇はやや垂直。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

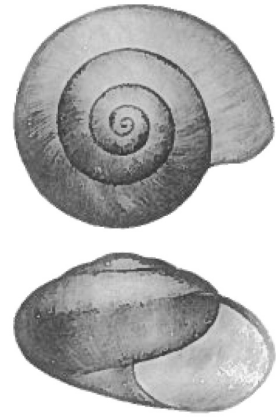
主に標高の高い場所の雲霧林の樹上の葉裏に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

樹林の伐採による乾燥化と外来捕食者の持ち込みを防ぐことが望ましい。

【関連文献】

上島 励, 1991; 千葉 聡, 2009.



(執筆: 黒住耐二)

出典: 平瀬 興一郎, 1907. 日本陸産貝類圖説 (七). 介類雑誌, 1 (12): pl. 12.

チチジマレンズガイ

Vitrinula chichijimana

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.3mm、殻径 5.9mm 程度で、螺塔はやや高く、螺層は少し膨らむ。体層周辺に突出した竜骨状の強い稜を持ち、その上下はやや膨らむ。殻表上面に皺状の成長肋と微細な顆粒を持つ。臍孔はやや広く開く。褐色で鈍い光沢がある。軸唇は肥厚しない。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林に生息していたと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島からのみ記録されていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬 興一郎, 1908; 東正雄, 1995.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆: 黒住耐二)

ハハジマレンズガイ

Vitrinula hahajimana

マイマイ目
ベッコウマイマイ科

小笠原諸島

EX

環境省

EX

【形態・生態】

殻は、殻高 3.3mm、殻径 5.9mm 程度で、螺塔はやや高く、螺層は少し膨らむ。体層周辺の稜は明瞭だが強く突出しない。殻表上面の皺状成長肋は強く明瞭で、微細な顆粒を持つ。褐色で弱い光沢がある。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

不明である。湿性林に生息していたと考えられる。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ記録されていたが、日本復帰後の生貝の確認はできていない。

【関連文献】

平瀬 興一郎, 1908; 前田和俊ら, 1987.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆: 黒住耐二)

アニジマカタマイマイ

Mandarina anijimana

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 18mm、殻径 24mm 程度で、やや丸く、硬質、螺層はやや膨れる。体層周縁は丸い。殻表はほぼ平滑。殻色は淡黄褐色で、色帯の有無に関して、変異がある。臍孔は狭く開くが、時に閉じることもある。殻口は厚く肥厚・反転する。地上性で、リター層の上部で休眠する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

乾性低木林に生息する

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島からのみ記録されており、クマネズミの捕食による減少が顕著である。野生化したノヤギによる植生破壊はノヤギの捕獲により改善すると考えられる。このような外来動物の影響を排除することが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S. 1996a; Chiba, S., 2007.



© 千葉聡

(執筆: 黒住耐二)

コガネカタマイマイ

Mandarina aureola

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 20mm、殻径 25mm 程度で、やや球形で、螺塔はやや高い。厚質堅固。周縁は角張らない。生貝の臍孔は閉じるが、幼貝の臍孔はやや広く開く。様々な変化する地色に 1 本か 3 本の色帯を持つ。地上性で、リター層の上部で休眠する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

乾燥の著しくない樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現時点では植生の改変が生存を脅かしていると考えられる。常にこの点に留意し、外来捕食者の侵入を常に警戒することが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S., 1989; 東正雄, 1995.



© 尾園 暁

(執筆: 黒住耐二)

チチジマカタマイマイ

Mandarina chichijimana

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 20mm、殻径 24mm 程度で、やや丸く、硬質、螺塔は高く、螺層はやや膨れる。体層周縁は丸い。殻表はほぼ平滑。殻色は淡黄褐色で、殻に 4 本の色帯を持つ。臍孔は閉じる。殻口は厚く肥厚・反転する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に湿性林の落葉下に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島の海岸沿いから崖上に主に生息するが、現在では外来捕食者のニューギニアヤリガタリクウズムシの影響で激減してしまっている。この外来捕食者のコントロールと残存生息地の植生の改変を行なわないことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; Ohbayashi, T. et al., 2007.



(執筆: 黒住耐二)

コシタカカタマイマイ

Mandarina conus

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島



環境省

【形態・生態】

殻は、殻高 21mm、殻径 21mm 程度の円錐形、厚質、螺塔は高く、螺層はわずかに膨れる。体層周縁は丸みを帯びる。殻色は褐色系の単色であることが多い。臍孔は閉じる。地上性で、リター層の下部で休眠する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

人為的かく乱の少ない乾性低木林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現時点では生息地の改変は比較的少ないが、今後も現在の自然度の高い状況を維持し、外来捕食者の定着を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1978a; Chiba, S., 2003.



© 千葉聡

(執筆: 黒住耐二)

ヒシカタマイマイ

Mandarina exoptata

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高 14mm、殻径 23mm 程度の垂菱形、薄質、螺塔は低く、螺層はわずかに膨れる。体層周縁に強い竜角を持つ。殻色は淡黄褐色で、色帯を持たない。殻表には細密な縮み状の螺状肋がある。臍孔はやや広く開く。殻口は肥厚・反転する。樹上と地表を利用する半樹上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

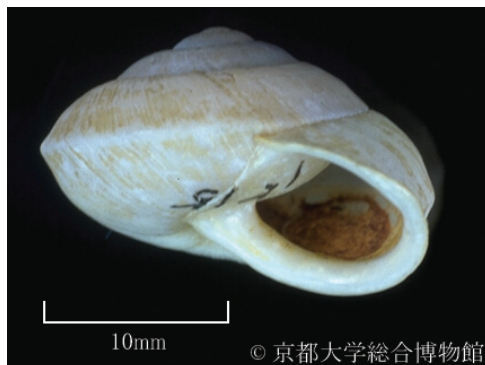
標高の高い場所の雲霧林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ記録されており、低密度ではあるが、生息が確認されている。生息基盤が脆弱であるため、外来捕食者の定着を防ぐとともに雲霧林の保護を行うことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; Chiba, S., 2003.



© 京都大学総合博物館

(執筆: 黒住耐二)

ヒメカタマイマイ

Mandarina hahajimana

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高 13.5mm、殻径 16.0mm 程度で、やや薄質、螺塔はやや低く、螺層はわずかに膨れる。体層周縁は丸い。殻色は淡黄褐色から濃褐色で、様々な様式の色帯を持ち、時にこれを欠く。殻表には極めて細かい螺状肋がある。殻表には弱い光沢がある。臍孔は狭く開くことが多いが、閉じたり、広く開く個体群もある。殻口は厚く肥厚・反転する。樹上性が半樹上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

標高の高い場所の雲霧林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島からのみ記録されている。生息基盤が脆弱であるため、外来捕食者の定着阻止や雲霧林の保護が望ましい。

【関連文献】

Chiba, S., 1996b; Chiba, S., 2003.



© 尾園 暁

(執筆: 黒住耐二)

キオビカタマイマイ(フタオビカタマイマイ)

Mandarina hayatoi

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

ヒメカタマイマイに類似し、さらに殻の変異が著しいが、生殖器の構造として、肥厚した陰茎をもち、その内部の壁が多いことで異なる。生息場所によって、半樹上性や地上性となっている。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

人為的かく乱の少ない乾性低木林などに生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現時点では生息地の改変は比較的少なく、今後も現在の自然度の高い状況を維持すべきであり、外来捕食者の定着を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S., 2003; Chiba, S. & A. Davison, 2008.



© 千葉聡

(執筆: 黒住耐二)

アナカタマイマイ

Mandarina hirasei

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、殻高 13mm、殻径 21mm 程度で、扁平、やや薄質、螺層はわずかに膨れる。体層周縁は丸い。殻色は淡黄褐色から濃褐色で、色帯を持たない群も多い。殻表はほぼ平滑。殻表の光沢は弱い。臍孔は広く開く。殻口は厚く肥厚・反転する。樹上と地表を利用する半樹上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

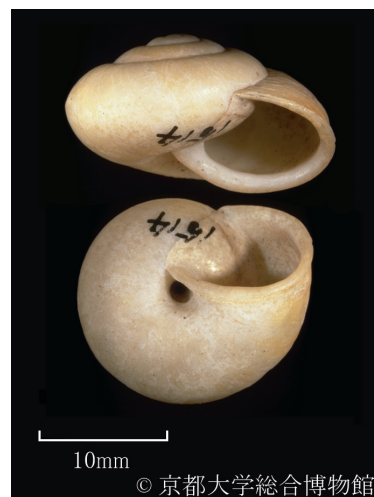
やや標高の高い場所の樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

父島、母島、南島から記録されているが、現在では外来捕食者のニューギニアヤリガタリクズムシの捕食によって激減している島も存在する。これら外来捕食者の影響を取り除く努力を行うと共に、その侵入を警戒せねばならない。もちろん、生息域の植生の改変には細心の注意が必要である。

【関連文献】

湊宏, 1978a; 千葉聡, 2009.



© 京都大学総合博物館

提供の写真を編集レイアウトしました

(執筆: 黒住耐二)

オトメカタマイマイ

Mandarina kaguya

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島



環境省



【形態・生態】

殻は、ヒメカタマイマイに類似するが、殻高や色彩は地域によって多様に変化する。生殖器の構造や DNA から識別される。生息域によって、樹上性、半樹上性、地上性と幅広い生活形を持つ。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

人為的かく乱の少ない乾性低木林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現時点では生息地の改変は比較的少なく、今後も現在の自然度の高い状況を維持すべきであり、外来捕食者の定着を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S., 2003; Chiba, S. & A. Davison, 2008.



© 千葉聡

(執筆: 黒住耐二)

カタマイマイ

Mandarina mandarina

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島 CR+EN

環境省 CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 21mm、殻径 28mm 程度で、やや丸く、硬質、螺塔は低く、螺層はやや膨れる。体層周縁は丸い。殻表はほぼ平滑。殻に濃紫褐色 2 本の幅広い色帯を持ち、むしろ体層周縁に殻色の淡黄褐色の色帯を持つように見える。臍孔は閉じる。殻口は厚く肥厚・反転する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

主に湿性林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

過去の植生の改変により減少し、現在では外来捕食者のニューギニアヤリガタリクウズムシによる捕食により、父島では激減してしまった。クマネズミによる捕食も生存の脅威となっている。これら外来捕食者の脅威を取り除くことが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; Chiba, S., 2003.



© 尾園 暁

(執筆: 黒住耐二)

アケボノカタマイマイ

Mandarina polita

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島 CR+EN

環境省 CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 20mm、殻径 25mm 程度で、やや球形で、螺塔はやや低い。厚質堅固。周縁は角張らない。成貝では臍孔は閉じるが、幼貝では臍孔が狭く開く。様々に変化する地色に主に 3 本の色帯を持つ。殻表はほぼ平滑で弱い光沢を持つ。コガネカタマイマイに極めて良く似るが、幼貝の臍孔のサイズと生殖器のペニス基部が厚くなる特徴で識別される。地上性で、リター層の上部で休眠する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや湿性の樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

植生の改変による樹林の乾燥化が現時点での生存に対する脅威と考えられる。常にこの点に留意し、外来捕食者の侵入を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S., 1989; 東正雄, 1995.



© 千葉 聡

(執筆: 黒住耐二)

ヌノメカタマイマイ

Mandarina ponderosa

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島 CR+EN

環境省 CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 19mm、殻径 23mm 程度で、硬質、螺塔はやや高く、臍孔は閉じる。殻口は厚く肥厚・反転する。母島北部の標高の高い場所に分布する個体群は、螺塔がやや低く、体層周縁に竜角を持ち、殻表の螺状肋は明瞭である。一方、母島南部の低地部から周辺属島に分布する個体群は、螺塔が高く、体層周縁は丸く、殻表の螺状肋が不明瞭である。地上性で、リター層の下部で休眠する。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

かく乱の少ない樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

母島、向島、姉島から記録されているが、小面積の島もあり、在来植生の改変を避け、外来捕食者の侵入を阻止することが望ましい。

【関連文献】

東正雄, 1995; Chiba, S., 2003.



© 尾園 暁

(執筆: 黒住耐二)

キノボリカタマイマイ

Mandarina suenoae

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 16mm、殻径 20mm 程度で、円錐形、やや薄質、螺層はわずかに膨れる。体層周縁は鈍く角張る。殻表は平滑。殻色はオリーブ色で、表面に強い光沢を持つ。通常色帯を持たないが、時に有する。臍孔は狭く開く。殻口は厚く肥厚・反転する。樹上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや標高の高い場所の湿性林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

兄島、父島からのみ記録されており、父島では外来捕食者のニューギニアヤリガタリクウズムシの定着により、激減している。このような外来捕食者の駆除や定着阻止が望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1978a; 千葉聡, 2009.



© 千葉 聡

(執筆: 黒住耐二)

コハクアナカタマイマイ

Mandarina tomiyamai

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 13mm、殻径 21mm 程度で、扁平、やや薄質、螺層はわずかに膨れる。体層周縁に弱い角を持つ。殻色は淡黄褐色から濃褐色の単色で、色帯を持たない。殻表はほぼ平滑。殻表の光沢は弱い。臍孔は広く開く。生殖器の形態も類似種と異なる。樹上と地表を利用する半樹上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや標高の高い場所の湿性林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

弟島、兄島、父島から記録されているが、弟島、父島では外来捕食者のニューギニアヤリガタリクウズムシの捕食などによって絶滅したものと考えられている。残る兄島では、このような外来捕食者の駆除や定着阻止を行うことが望ましい。

【関連文献】

富山清升, 1992; Chiba, S. & A. Davison, 2008.



© 千葉 聡

(執筆: 黒住耐二)

ミスジカタマイマイ

Mandarina trifasciata

マイマイ目
オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR+EN

環境省

CR+EN

【形態・生態】

殻は、殻高 22mm、殻径 26mm 程度で、やや丸く、硬質、螺層はやや膨れる。体層周縁は丸い。殻表はほぼ平滑。殻色は淡黄褐色の地に細い3本の色帯を持つことが多い。表面の光沢は弱い。臍孔は通常閉じるが、狭く開く個体もある。殻口は厚く肥厚・反転する。地上性。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや乾性な樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

智島、媒島から記録されており、両島ともノヤギによる植生破壊で樹林が分断化・乾燥化し、生息域が減少してしまっている。さらに、クマネズミの捕食も影響を与えている。ノヤギの排除は行われているが、それ以外の脅威も取り除くことが望ましい。

【関連文献】

湊宏, 1978a; Chiba, S., 2003.



© 千葉 聡

(執筆: 黒住耐二)

カタマイマイ属の一種

Mandarina sp.

※備考 (p.610)

マイマイ目

オナジマイマイ科

小笠原諸島

CR-EN

環境省

【形態・生態】

地上性。殻は、殻高 23mm、殻径 28mm 程度で、やや丸く、硬質、螺塔は高く、螺層はやや膨れる。体層周縁は丸い。殻表はほぼ平滑。殻色は淡橙色系の地色に 4 本の色帯を持つ。臍孔はわずかに開く。地表性。時に、オトウトカタマイマイと表記されている種である。

【分布の概要】

小笠原諸島

【小笠原諸島における生息環境】

やや湿性の樹林に生息する。

【小笠原諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

弟島、兄島から記録されているが、生息地が限られているため、生息地の改変や外来捕食者の定着を防ぐことが望ましい。

【関連文献】

Chiba, S., 1996a; 千葉聡, 2009.



© 千葉聡

(執筆: 黒住耐二)

【種名・学名などの準拠文献】

目名は次の文献に準拠した。

文部省・日本動物学会 (編), 1988. 学術用語集 動物学編 (増訂版). 丸善. 1122 pp.

和名、学名、配列は、基本的に以下に準拠し、一部の種に関しては評価者の見解に従った。

環境省報道発表資料 平成 19 年 8 月 3 日 哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて <http://www.env.go.jp/press/press.php?serial=8648>

【備考】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
チチジマスナガイ	オガサワラスナガイとチチジマスナガイを同種とする見解もあるが、詳細な検討が行われていないので、ここでは別種として取り扱った。
オガサワラスナガイ	
エリマキガイ	環境省版レッドリストではエリマキガイ <i>P. dedecora</i> が VU。
タマゴナリエリマキガイ	
ヘタナリエンザガイ	母島の個体群は、ヒラヘタエンザガイ <i>H. mirabilis</i> として別種とされることもあるが、ここではヘタナリエンザガイとして評価した。
ハハジマヒメベッコウ	亜種レベルの詳細な検討が行われていない現状なので、今回は原記載時の分類に従って評価した。ただし、ハハジマヒメベッコウに関しては、亜種を区分しない包括的な取り扱いも加味している。
アニジマヒメベッコウ	
コハハジマヒメベッコウ	
アツクチハハジマヒメベッコウ	
カタマイマイ属の一種	チチジマカタマイマイに類似する種で、弟島の固有種とされる。

【留意種とした理由】

和名	留意種とした理由
カサガイ	本種は潮間帯に生息する大型のカサガイ類で、小笠原諸島の固有種である。海産動物としては珍しい天然記念物となっており、減少傾向は認められるものの絶滅の可能性は低い。本種は小笠原諸島の潮間帯環境を指標する種であり、モニタリングも可能であることから留意種とした。
フネアマガイ	近年、自然分散により小笠原に定着・繁殖していると考えられる種である。本種が生息する河口域は、河口閉塞や水質汚染の影響を直接受けることから、本種は良好な環境の指標となる。

【関連文献】

- 東正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社. xvi + 343 pp. + 80 pls.
- Chiba, S., 1989. Taxonomy and morphological diversity of *Mandarina* (Pulmonata) in the Bonin Islands. *Transactions and Proceedings of the Paleontological Society of Japan, New Series*, 155: 218-251.
- Chiba, S., 1996a. A new species of *Mandarina* (Pulmonata, Camaenidae) from Anijima of the Bonin Islands. *Bulletin of the National Science Museum, Series C (Geology & Paleontology)*, 22(3,4): 53-61.
- Chiba, S., 1996b. Ecological and morphological diversification within single species and character displacement in *Mandarina*, endemic land snails of the Bonin Islands. *Journal of Evolutionary Biology*, 9: 277-291.
- Chiba, S., 2003. Species diversity and conservation of *Mandarina*, an endemic land snail of the Ogasawara Islands. *Global Environmental Research*, 7(1): 29-37.
- Chiba, S., 2007. Morphological and ecological shifts in a land snail caused by the impact of an introduced predator. *Ecological Research*, 22: 884-891.
- 千葉聡, 2009. 崖淵の楽園: 小笠原諸島陸産貝類の現状と保全. 地球環境, 14(1): 15-24.
- Chiba, S., A. Davison & H. Mori, 2007. Endemic land snail fauna (Mollusca) on a remote Peninsula in the Ogasawara Archipelago, northwestern Pacific. *Pacific Science*, 62(2): 257-262.
- Chiba, S. & A. Davison, 2008. Anatomical and molecular studies reveal cryptic species of the endemic genus *Mandarina* (Pulmonata: Helicoidea) in the Ogasawara Islands. *Journal of Molluscan Studies*, 74: 373-382.
- Chiba, S., T. Sasaki, H. Suzuki & K. Horikoshi, 2008. Subfossil land snail fauna (Mollusca) of central Chichijima, Ogasawara Islands, with description of a new species. *Pacific Science*, 62(1): 137-145.
- 千葉聡・和田慎一郎・森英章, 2012. 小笠原諸島母島における陸産貝類の現況とその価値について. 小笠原研究年報, (35): 1-16.
- Fukuda, H., 1993. Marine Gastropoda (Mollusca) of the Ogasawara (Bonin) Islands. Part 1: Archaeogastropoda and Neotaenioglossa. *Ogasawara Research*, 19: 1-85.
- Fukuda, H., 1994. Marine Gastropoda (Mollusca) of the Ogasawara (Bonin) Islands. Part 2: Neogastropoda, Heterobranchia and fossil species. *Ogasawara Research*, 20: 1-126.
- Fukuda, H. & T. Mitoki, 1995. A review of the family Assimineidae (Mollusca: Gastropoda: Neotaenioglossa) stored in the Yamaguchi Museum. Part 1: Subfamily Omphalotropidinae. *Bulletin of Yamaguchi Museum*, 21: 1-20.
- 平瀬信太郎・瀧庸, 1951. 天然色写真版 日本貝類図鑑 日本列島とその附近産. 文教閣. xxvii + 46 pp. + 134 pls.
- 平瀬興一郎, 1907a. 日本陸産貝類圖説 (一). 介類雑誌, 1(6): 209-212, pl. 6.
- 平瀬興一郎, 1907b. 日本陸産貝類圖説 (二). 介類雑誌, 1(7): 246-248, pl. 7.
- 平瀬興一郎, 1907c. 日本陸産貝類圖説 (三). 介類雑誌, 1(8): 251-256, pl. 8.
- 平瀬興一郎, 1907d. 日本陸産貝類圖説 (四). 介類雑誌, 1(9): 296-299, pl. 9.
- 平瀬興一郎, 1908. 日本陸産貝類圖説 (十一). 介類雑誌, 2(5): 153-158, pl. 16.
- 波部忠重, 1942. 日本産カワザンショウガヒ科. *Venus*, 12(1-2): 32-56, 4 pls.
- 堀越和夫・立川浩之・黒住耐二, 1997. カサガイ. In: (社) 日本水産資源保護協会 (編), 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料Ⅳ, pp. 22-30, 113. (社) 日本水産資源保護協会 (編), 東京.
- 岩下典弘, 1978. 江原眞伍博士旧蔵貝類標本目録. 天理高等学校. 78 pp.
- 黒田徳米, 1930. 小笠原島の陸産及び淡水産貝類. 日本生物地理学会会報, 1 (3): 195-204, 2pls.
- 黒田徳米, 1945. キセルモドキ属に就いて. *Venus*, 14(1-4): 43-62, 1 pl.
- 黒住耐二, 1988. 小笠原諸島における陸産貝類の種組成とその絶滅に関与する要因. 小笠原研究, 15: 59-109.
- 前田和俊・太田秀・鹿野康裕・上島励, 1987. 横須賀市自然博物館所蔵平瀬貝類標本目録 (II) 前鰓亜綱, 有肺亜綱 (オナジマイマイ科を除く). 横須賀市博物館資料集, (11): 1-71.
- 増田修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ピーシーズ. 240 pp.
- 湊宏, 1974. 日本産陸棲貝類の生殖器の研究—IV. 小笠原諸島父島産ボニンキビの生殖器. *Venus*, 33(2): 85-86.
- 湊宏, 1977. 小笠原諸島のオカモノアラガイ科. 国立科学博物館専報, (10): 83-87.
- 湊宏, 1978a. 小笠原諸島産カタマイマイ属貝類の種分化. 国立科学博物館専報, (11): 37-48, 3 pls.
- 湊宏, 1978b. 小笠原諸島の石灰岩地における陸産貝類. 南紀生物, 20(1): 31-34.
- 湊宏, 1980. 小笠原諸島のヤマキサゴ科. *Venus*, 38(4): 235-246.
- 湊宏, 1991. 小笠原諸島兄島のオガサワラキセルモドキ類. ちりぼたん, 21(4): 77-81.
- Nakano, T., K. Takahashi & T. Ozawa, 2007. Description of an endangered new species of *Lunella* (Gastropoda: Turbinidae) from the Ogasawara Islands, Japan. *Venus*, 66(1-2): 1-10.
- Ohbayashi, T., I. Okochi, H. Sato, T. Ono & S. Chiba, 2007. Rapid decline of endemic snails in the Ogasawara Islands, western Pacific Ocean. *Applied Entomology and Zoology*, 42(3): 479-485.
- 奥谷喬司 (編著), 2000. 日本近海産貝類図鑑. 東海大学出版会. xlviii + 1173 pp.
- 大山桂, 1940. 小笠原島貝類採集記. *Venus*, 10(1): 51-58.
- 佐々木哲朗・佐竹潔・土屋光太郎, 2009. 小笠原諸島における外来種ヌメカワニナと固有種オガサワラカワニナの分布, 特に河川改修工事が与える影響について. 陸水学雑誌, 70(1): 31-38.
- 富山清升, 1991. 父島列島における陸産貝類の分布と地域別自然度評価—特に兄島の陸産貝類の生息状況—. 小笠原研究, 17: 1-31.
- 富山清升, 1992. 小笠原諸島兄島の陸産貝類相, 特に空港予定地の現況とその保護. *WWFJ Science Report*, 1(1): 149-195.
- 富山清升・黒住耐二, 1992. 小笠原諸島の陸産貝類の生息現況とその保護. 地域学研究, 5: 39-81.
- 上島励, 1989. 小笠原諸島兄島のオガサワラヤマキサゴ類. 小笠原研究年報, 12: 42-48.
- 上島励, 1991. 小笠原諸島のベッコウマイマイ超科. In: 東京都立大学小笠原研究委員会 (編), 第2次小笠原諸島現況調査報告書, pp. 241-244. 東京都立大学, 東京.
- Ueshima, R. & T. Kurozumi, 1988. Anatomical features of *Hirasea* (s.s.) *diplomphalus* and taxonomic position of the genus *Hirasea* Pilsbry, 1902 (Pulmonata: Sigmurethra). *Venus*, 47(4): 261-270.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. *WWFJ Science Report*, 3: 1-182.